



## 総合大学としてのバランス

町田龍一郎  
生物科学系助教授

### 30年前のオリエンテーション

私は東京教育大学の理学部としては最後となる学年の出身者です。留年などされて残られても面倒だということではなかったのですが、単位をどんどん出していただけという恩典を享受できた学年でもあります。年々学生が減り寂れていくという、灰色がかったキャンパスではありました。しかし、生物学教室（動物学専攻）で学んだ学生時代をノスタルジックに思い出すのです。頑としてある講座制には分野の泰斗であられる教官がおられ、話の端々に伝説的な先生方のお名前がでる、移転にかかわる大変な時代であったのですが、時間はゆっくりと流れ、伝統に裏付けられたアカデミズムの香りがありました。私はそのような教室で学びました。

今から30年も前に受けた、新入生オリエンテーションを時々思い出します。いちばん覚えているのは、先生が当たり前

のように言われた、「学問にはやはり語学が重要です。だから一生懸命英語を勉強して下さい。そして第二外国語（必修）には、できたらドイツ語を選択してマスターして下さい」、さらに「これによしとせず、がんばって第三外国語も履修し、フランス語なども読めるようになって下さい」という言葉でした。素直で真面目であった私たちは、成ったかどうかは別として、そのように努力しました。私も努力をし、大学院の入学試験にも第二外国語の試験もあり、時間をかけて勉強し、独・仏の文献もどうにか読みこなせるようになりました。私はクラシカルな動物系統分類学（比較形態学・比較発生学）を専攻し現在に至りますが、読むべき文献の半数は独語、仏語という研究において、先生からのガイダンスは大変有り難いものとなったのです。

## 第二外国語が必修でなくなった

生物学類には、カリキュラムからの制約により、第二外国語を必修からはずさざるを得なかった経緯があります（一票差で決せられました）。第二外国語を必修からはずす根拠として、カリキュラム自体の複雑な問題の他に、1) 現在の（あるいは最先端の）生物学においては論文は殆ど英語で書かれ、英語をマスターすれば事足る、2) 学生の語学学習は不十分であり、その他の言語を科したら英語も共倒れになる、3) 現在の当該分野にあって重要度の低い言語の学習に時間を費やすべきでなく、また、その学習にカリキュラムの自由度を減ずる程の価値は見いだせない、等のものであったと記憶します。そして流れとして大学院の試験からは第二外国語が外れたこともあり、自主履修となった英語以外の語学学習に努力する学生は本当に少なくなりました。

このようはカリキュラムの再編の際に危惧したことが、これほど如実になるとは思いませんでした。私たちの分野の専門的な教育指導において、必読の文献を学生が殆ど読めないのです。これは私の専攻する動物系統分類学のようなクラシカルな分野の後退につながることは明かです。「進化」の背景なしには現代生物

科学は行うことはできませんから、進化を学問する系統分類学はクラシカルであると同時に、現代生物科学でもやはり非常に重要な分野です。そして、系統分類学は形態学のアプローチを汎用しますが、形態学のアプローチは生物の理解にとって最も基本的・必須なものであることも確かなのです。この動物系統分類学のようなクラシカルな分野に、今、このようなことが起こっているのです。

## クラシカルな分野の必要性

大学における教育・研究において、すべての分野をバランス良く発展させることは最も重要なことと、多くの方々は考えられていると思います。しかし、先端領域・重点領域等を推進するのが急務であり、その中にあって、このようなクラシカルな分野の浮沈は二義的なものであるとの考えもあろうかと思えます。

しかし、独創性が喧伝される昨今、本当の独創性の創造は、故丘英通先生（東京教育大学理学部長・日本動物学会長などを歴任）が絶えず主張されておられたように（丘英通（1985）「習い性になるか」みすず書房）、「伝統」なくしては有り得ないのです。例えば、最近の動物学において最先端の分野の一つである、形態形成の分子発生的議論において、そ

の要点は19世紀後半からのドイツを中心とした壮大な比較形態・発生学的サーヴェーに萌芽しており、また、当該分野のリーダーにドイツ学派が多いということに気づかねばなりません。

科学という領域において、ある分野では日本は最先端かもしれません。しかし、悲しく悔しいことですが、全体的にみるとやはり「発展途上国」であることを痛感することがしばしばです。それは、西洋科学を導入し、学んできた日本の宿命であり、このような構図は百年・二百年のタームで少しずつ変化させて行かざるを得ないほどの、決定的なものと思います。そのような日本にあって、どうしたら良いか。自ら伝統を長期にわたり苦心して築いていくと同時に、「伝統の輸入」も試みなければならないのでしょう。単にクラシカルな研究達などと安穩とし（「博物学的」遺物などとの誇りは見当違いも甚だしい）、先人が血と汗であがなった成果—「古典」に立ち戻る労を厭っている場合ではないのです。

#### 大学院化・独立法人化の波の中で

こと生物科学において、先端領域の重視、クラシカルな分野の後退は日本の全大学規模で急激に進んでいます。この中にあって、筑波大学の生物科学系は群を

抜いてバランスの良い発展を遂げていると誇れるものと思います。その筑波大学の生物科学の教室で、先に述べたようにクラシカルな分野が存亡の危機にあるのです。総合大学には、バランスの良い、アカデミズムの全貌が見える発展がぜひとも必要です。勿論、先端領域・テクノロジーの推進も大変重要です。しかし、言うまでもなく、総合大学に求められる基本理念の大きな柱の一つは、アカデミズムの健全な発展に対する貢献です。

しかし、大学院化・独立法人化の波の中で、生物科学の教室でおこっているようなことが全大学規模で起こりはしないか。人文科学・自然科学・工学・農学・医学・芸術・体育・・・、すべての領域・分野を健全にバランスをとって発展させることが総合大学たる筑波大学の使命です。いや、筑波大学の今後のあるべき姿として、健全なバランスを保った大学体制を指向すべきなのです。このために、十分な注意と検討をもって、さらにさらに、どうすべきか、何はしていけないかを考えていきたいと思っています。

(まちだりゅういちろう

動物系統分類学)